

## ごあいさつ



芳川豊史教授

みなさま、こんにちは。

皆様におかれましては、出口の見えないコロナ禍のなかで、耐え忍ぶ生活を送っておられることと思います。われわれ名古屋大学呼吸器外科では、こうした情勢の中でも、同門一同協力して、日々の臨床を基に地域医療の礎となることを目指すとともに、大学の使命である、臨床、研究、教育の3本柱の重要性を肝に銘じ、創造的な仕事ができるように日々研鑽を積んでおります。

さて、本年も、コロナ禍でありながらも、昨年と同じペースで、肺癌の手術を主として日常臨床を行っております。低侵襲手術においては、通常の胸腔鏡手術に加え、単孔式(一つの孔で行う)手術も適応を限って確実に行っております。また、当科の「うり」の一つであるロボット手術は、順調に症例数を伸ばしており、7月からは、ロボット手術用の機器(ダ・ヴィンチ)が2機運用となり、最大で週5例のロボット手術が可能となりました。拡大手術においては、同門である心臓外科教室との連携を武器に、大血管処置のいる縦隔腫瘍や肺癌の手術にも即座に対応できる体制をとっており、多くの症例を経験しております。このように、どのような呼吸器外科症例にも対応できる体制をこれまで通り維持しております。これもひとえに、当院の強みである呼吸器内科、放射線診断科、放射線治療科との連携、関連病院を含む地域医療の先生方からのご紹介の賜物と理解しております。

研究におきましては、3次元CT画像を日々の臨床に応用するだけでなく、手術シミュレーションの研究を中心に、科研費、AMEDなどの公的資金を基に、3次元変形シミュレーションや脱気シミュレーションなどの開発を行っております。将来的に、日常臨床に応用できることを目指し、日々努力しております。また、種々の疾患における貴重な臨床データを使用させていただき、当科が主軸となる研究から本邦および世界的なネットワークに基づく研究に至るまで、種々の臨床研究を積極的に行っております。研究によって明らかになった新しいエビデンスを日常診療に還元することが、我々の狙いです。

教育におきましては、高度化する外科技術をできる限り標準化して普及させることができるように、様々な角度から種々の勉強会を行い、医学生から若手呼吸器外科医に至るまでの教育を推進しております。その効果の一つとして、この3年間の新入局員数は、5名、4名、6名(2021年は8月現在)と安定しており、我々の仲間が着実に増えていることを示しております。

さらに、悲願でありました、「名古屋大学での肺移植」の準備が始まりました。現在は、ワーキンググループが発足したところですが、病院全体の協力体制を確立し、脳死肺移植実施施設申請のための準備を進めております。実臨床としては、すでに、脳死肺移植待機患者を含む10名以上の肺移植患者さんを名古屋大学で日々管理しておりますので、真の意味での地域の需要にあったチームになることができるように今後も精進したいと思っております。

最後になりましたが、本年も、名古屋大学呼吸器外科を中心として、20 を超える関連病院の同門一同が力を合わせて、より良い呼吸器外科医療を確立すべく、日々努力していきたいと存じます。

今後ともよろしくお願ひ申し上げます。